まな板の文化史

――型式の変遷と家事労働形態の変化――

Ａ－21　　添 田　郁 美

目　次

はじめに

第１章　日本のまな板――型式の変化――
（１）　日本最古のまな板
（２）　四脚式まな板
（３）　両まくら式まな板
（４）　脚なしまな板
（５）　まな板の型式変化の原因

第２章　中国のまな板――礼器から台所道具へ――
（１）　古代中国の俎――まな板のルーツ
（２）　まな板の型式
（３）　まな板の型式変化の原因

まとめ

はじめに

この人間科学研究は、自分で調べたいと思うことであれば何を調べても良いという講義である。しかし「何でも良い」といわれると、却って私には「特にこれを調べたい」というものがないことに気づかされ、実のところ何を調べようか迷ってしまった。そんな折り、父が何気なく「まな板は、魚を食べているところで使われているのではないか」と言ったことばが気になった。確かに伝統的に魚を食べてきた日本では「まな板」を使っている。しかし、肉食の国・中国でもまな板は使われているではないか。では、ほかの国はどうなのだろう――そんな風に考えがふくらんでゆき、気がつくと、いろいろな国の言語を和〇辞典、〇和辞典で調べていた。調査の結果は意外であった。調べた限りにおいて、「まな板」を言い表わす単語をもたない言語がほとんどだったのである(1)。ひょっとすると、世界の中で昔から「まな板」を使っている国はほとんど無いのではないか――こう考えた私は、ふだんから見慣れている日本のまな板についてもっと詳しく調べてみようと思った。日本でまな板はどう生まれ、発展していったのか。時代などにより違いがあるのならばその違いは何によって起こったのか。隣国・中国のまな板とはどのような関係にあるのか。調べ出すと次から次へと興味は広がっていった。

第１章　日本のまな板　――型式の変化――

（１）日本最古のまな板

日本最古のまな板の例（**図１**）としては、平城宮跡の佐紀池下層遺構より出土したものが挙げられる。このまな板は、杉の割板材からつくられた、下駄状のものである。脚は台脚の形をしていて、一枚の板から作り出されたようで、脚と板の面に切れ目がない。木心をさけ、木裏面を上とした横木取りでできている(2)。

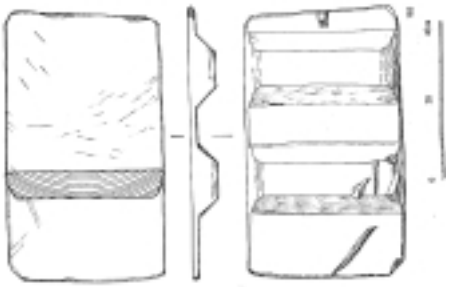

図１　日本最古のまな板（平城宮趾出土）

この事例は突出して早い時期のものであり、これに続く事例との間に大きな時間の開きがある。また、脚の部分が掘り出して作られているという、これ以降の事例とは違う手法によって作られているため、しばらく別扱いとすることにした。

（２）四脚式まな板

次に資料から伺われるまな板の型式は、板に４つの脚がついた「四脚式」のものである。その事例を、**表１**に示す。

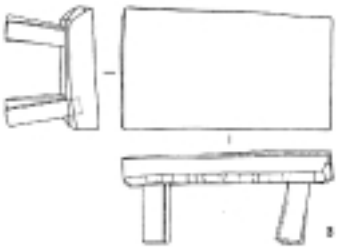

図２

図３

図４

表１　「四脚式まな板」の事例

	時期	出典・その他	形	参考文献	使っている人	図
1	9～10 世紀	静岡県浜松市伊場遺跡出土	はめこみ式、中央部は凹みがある	三浦 1993		2
2	12 世紀後半	『地獄草子』	脚が蛙股	三浦 1993	鬼	
3	13 世紀初頭	『粉河寺縁起』	まっすぐな脚	三浦 1993	猟師	
4	13 世紀初頭	『北野天神縁起』	まっすぐな脚	三浦 1993	鬼	
5	1311 年	『松崎天神縁起』	甲型、脚が蛙股	三浦 1993	銅細工師	3
6	14 世紀前半	『聖徳太子絵伝』	まっすぐな脚	三浦 1993	貴族	
7	1351 年	『慕帰絵詞』	まっすぐな脚	三浦 1993	覚如（僧侶）屋敷の使用人	4
8	15 世紀後半	『酒飯論』	脚が上下に突き出ている	三浦 1993	僧侶	5
9	1500 年	『七十一番職人歌合』	まっすぐな脚	三浦 1993	職人	
10	1660 年	『女諸礼集』	甲型	小菅 1998	上級武士	
11	江戸時代	『早見献立図』	甲型	小菅 1998	上級武士の包丁人	6
12	江戸時代前期	『江戸図屏風』	甲型、まっすぐな脚	三浦 1993	包丁人（将軍の狩のときの絵）	7
13	1690 年	『人倫訓蒙図彙』	甲型、まっすぐな脚	三浦 1993	割肴師、料理人	
14	1695 年	『吉原風俗図絵集』	まっすぐな脚	小菅 1998	揚げ屋の料理人	8
15	1841 年	『女諸礼綾錦』	甲型	小菅 1998	中級武士の使用人	
16	18 世紀後半	『難福図巻』		三浦 1993		

図５

図６

図７

図８

表１で、まな板の板面が蒲鉾状になっているものを甲型とした。このように表面を丸くつくるのは、調理物への包丁の当たりをよくするためと思われる[3]。脚が蛙股になっている絵もあった。これは見た目を良くするためだったのであろうか。

（３）両まくら式まな板

四脚式まな板が現れてから、次のまな板の型として、下駄のように二つのまくらがついた、「両まくら式まな板」が現れた。その事例を**表２**に示す。

表２でみられる吸付桟技法とは、板の裏側に「あり溝」とよばれる台形断面の溝を掘り、それと同型に角材の上端を加工して、それを板の横から滑り込ませ、内側が扇型に広がった台形になるように加工してあることで、角材と床板を接着させる[4]という技法（吸付機技法）である。この技法を使うことにより、板が反り返らなくなるという効果もある。

表２　「両まくら式まな板」の事例

	時期	出典・その他	形	参考文献	使っている人	図
1	14 世紀	鎌倉市諏訪東遺跡出土	木釘により取り付けた	三浦 1993		
2	14 世紀初頭	『春日権現験記絵』	脚が端に付いていて、橋桁状になっている	小菅 1998	左衛門大夫の使用人	9
3	14 世紀中ごろ	鎌倉市若宮大路周辺遺跡群出土	平たい二脚を木釘により取り付けた	三浦 1993		10
4	16 世紀後半	松任市宮保光明寺遺跡出土	両面に刃物痕がある	三浦 1993		
5	江戸時代	『雪の図絵巻』	まくらが下駄のように付いている	山口 1978	行商	
6	18 世紀初頭	『どうけ百人一首』	まくらが下駄のように付いている	三浦 1993		11
7	18 世紀	千代田区江戸･一橋高校地点出土	吸付桟技法	三浦 1993		12
8	18 世紀	港区増上寺子院群出土	吸付桟技法	三浦 1993		
9	1826 年	『略画職人尽』		三浦 1993		
10	19 世紀初頭	『日用助食かまどの賑ひ』	まくらが下駄のように付いている	三浦 1993	商家の女	
11	1890 年	『くりやの心得』	まくらが下駄のように付いている	三浦 1993	女	13
12	明治 43 年	『時事新報』	まくらが下駄のように付いている	小菅 1998	女	14
13	明治時代	『ガス灯からオーブンまで』		高橋･馬場 1986		

図９

図 10

図 11

図 12

図 13

図 14

両まくら式まな板が登場してからも、四脚式まな板はかなり長い間――江戸時代まで――並行して使われていたようである。しかし明治になると、四脚式まな板は姿を消し、両まくら式がもっぱら使われるようになる。

なぜ、四脚式から両まくら式に移っていったのであろうか。四脚式のものは置いたところに凹凸があるとがたがた揺れてしまう。このことは学校の机などで経験した人も多いであろう。揺れないようにする最も良い方法は、数学で「三点が決まると一平面が決まる」とあることからも分かるとおり、三脚にすることである。しかし、まな板を三脚にしたとして、脚のない端で力を入れて切ると、まな板が倒れてしまう。三脚のまな板は実用的ではないのである。あるいは、まな板の脚を三脚にするといったことを、誰も考えもしなかったのかもしれない。このようなこともあり、四脚式よりはがたがた揺れない、安定したものとして、二脚の、まくら式まな板ができたのではないだろうか。そして、まくらを吸付桟技法により取り付けることによってまな板が反ることがなくなり、より使いやすくなったのではないだろうか。

図 15

（4）脚なしまな板

以上の考察から明らかなように、型式の変遷はあったにせよ、古来、日本のまな板には脚がついているのが普通であった。では、いつから脚やまくらのない、現在使われているようなかたちのまな板に変わったのであろうか。

ここでいう「脚なしまな板」とは現在多くの家で使われている、脚がなく、単なる板状の形をしたまな板のことである。小菅桂子氏によれば、1913 年の『婦人之友』[5]に長方形の板状のまな板[6]（**図 15**）が描かれていることが見える。また同じく小菅氏によると 1923 年の『住宅』に長方形の板状のまな板[7]（**図 16**）が描かれている。これらより、脚やまくらが無いまな板は、大正時代あたりから登場したようである。しかし、実際にこれが普及したのは、昭和に入ってからのようである[7]。

図 16

そして今日では、プラスチック製のまな板が普及し、木製のまな板の姿を見ることも珍しくなりつつある。樹脂製のまな板のうち、最初に開発されたのは業務用のポリエチレンまな板で、昭和 42 年から本格的に生産が開始された。一方、家庭用のプラスチックまな板は、昭和 43 年から発売された[8]。木でできたまな板とは違って容易に漂白ができることなどから、木製のまな板よりもプラスチッ

ク製まな板のほうが衛生的だと考えられ、今日の隆盛に至っているようである。今では、抗菌加工を施すなどして付加価値をつけたプラスチック製まな板も現われ、使う側の潔癖志向にはさらに拍車がかかっているように思われる。

（５）まな板の型式変化の原因

「脚つき」から「脚なし」へとまな板の型式が移り変わった背景には、料理するときの姿勢の変化が関係しているように思われる。

もともと日本の台所仕事では食材を切るさい、座っておこなうことがほとんどだった。床の上にまな板を置き、その前に座って食材を切っていたのである。まな板に脚がなかったら、いくら座っているといっても食材を切る人は前かがみにならなければならず、切っているときの姿勢はつらかったであろう。まな板の脚は、必要不可欠なものだったのである。

では、どうして床に座って食材を切っていたのであろうか。日本では古来、床に座って生活していた。座る生活の中で、座っていてもできることを立って行うことは、品がないと考えられていたのではないだろうか。**表１**を見ると、まな板を使っていた人の多くが良家の使用人、包丁人であったことが伺える。良家に仕えるような権威を持っている人が、品がないやり方をすることはほとんどないため、座って切っていたのではないだろうか。

ところが、西洋化の流れで調理台が入ってきたら、台所仕事は立っておこなわれるようになった。調理台の上に脚の付いたまな板では、今度は高すぎて力が入らず使いづらい。まな板から脚が消えた原因はこのあたりにあるのではなかろうか。

今までは、日本のまな板について述べてきた。では、日本のまな板の淵源とされ、今もまな板が普通に使われている中国では、まな板はどのように発展してきたのであろうか。

第２章　中国のまな板　――礼器から台所道具へ――

（１）古代中国の俎（ソ）――まな板のルーツ

俎とは中国の古代において、礼をおこなう際の祭具である。俎は生贄をささげるときに、生贄をのせる台として使われていた。漢代より後になると、俎の例が見当たらないため、俎は漢代まで使われて、それ以降は消滅していったと考えられている。これまでの発掘調査により、木・石・銅・陶器・漆でできた俎が出土している。俎の型式としては長方形の供物をのせる台板に脚が四本付いているもの、その四本の脚の上部がつながっているもの、短辺に板足をつけた二本足のものなどがある(9)。

俎の中には、一面の刀痕があるもの、石刀の刃の先端が刺さった状態のものが出土している。これによって、俎の存続期間を通して、俎にはまな板としての用途があったことが知られる。また文献史料では、『史記』殷本紀や陳丞相世家に、俎がまな板として使われたことが記されている(9)。

（２）まな板の型式

（１）では中国でのまな板ルーツといえる俎について述べてきた。次に、出土遺物や絵画史料に見えるまな板の例を、**表３**に示すこととする。

表３　中国におけるまな板の例

	時期	出土場所・出典	形	参考文献	図
1	戦国晩～前漢早期	山東臨沂金雀山	木製、四脚、長方形	間瀬 2001	
2	後漢	四川徳陽出土画像塼	二脚または四脚、長方形	田中 1985	17
3	後漢	遼寧遼陽棒台子 1 号墓壁画	脚なし、長方形	田中 1985	
4	後漢	四川成都出土画像塼	四脚	田中 1985	18
5	後漢後期	山東諸城涼台画像石墓	途中三本に分かれているが、大まかには二脚、長方形	田中 1985	19
6	後漢後期	四川彭県義和公社出土画像塼	途中二本に分かれているが、大まかには二脚、長方形	田中 1985	
7	後漢末期	山東沂南画像石墓		田中 1985	
8	魏～晋	甘粛嘉峪関 1 号墓壁画	二脚または四脚	田中 1985	20
9	北宋	『清明上河図』	脚なし、円形	田中 1995	
10	北宋	河南偃師酒流溝画像塼墓	脚なし、円形	田中 1985	21
11	宋末～元初	山西平定東回村壁画墓	脚なし、円形	田中 1985	22
12	南宋	甘粛隴西仁寿山墓塼彫	脚なし、円形	田中 1985	

図 17

図 18

図 19

図 20

図 21

図 22

表３でまな板の例となる絵の中には、まっすぐ前から見たように描かれており、何本脚があるのかわからないものもあった。まな板の型式としては、もともと四脚であったところに、やがて二脚のものも出てきた、ということのようである。しかし、まな板の祖先に

あたる俎には、早くから二脚のものがみられる[8]ことから、当初より二脚のまな板も使われていたとも考えられる。

隋・唐時代におけるまな板の事例を見つけることができなかったので、脚無しのまな板が使われ始めた時期ははっきりしないが、遅くとも宋代には、まな板が脚つきから脚なしに変わったことがわかる。また、まな板の脚がなくなるとともに、まな板の形状が長方形から円形へと変化したこともわかる。

（３）まな板の型式変化の原因

中国では、古くは地上に筵を敷いて座るという生活をしていた。後漢末期になると台床の上に座るようになり、このころから胡床と呼ばれる折りたたみ式のいすが使われだしたが、腰掛けることははなはだしい不作法とされていた。その後、背もたれつきの台床があらわれたり、手すりつきがあらわれたりした。唐代になると西方文化の影響で四脚形式のいすも採り入れられ、いす文化が発達した。そして、宋初のころには生活様式が腰掛け式のいす座に改まった[10]。このように座り方が変化して行ったことは、宴飲図の画像からもうかがうことができる。後漢から魏晋時代では、正坐をしている人々が描かれている画像がある。晩唐では腰掛けている人々が描かれている画像があるが、五代で背もたれのない長椅子のような物の上にあぐらを組んで坐っている画像もある。宋代以降は椅子に腰掛けている人々が描かれた画像だけが見つかっている[11]。つまり、晩唐から五代のころに、座りかたが正座からいすに腰掛けるように変わったのである。

まな板の型式の変化が起こった時期が唐代から宋代にかけての時期であり、座りかたの変化が起こった時期が晩唐から宋代にかけてであった――文化史上のこの二つの変化の時期が重なっていることは、一体何を意味しているのであろうか。先に掲げた**表３**から明らかなように、脚付きまな板の時代には座って食材を切る者ばかりでだったのに対し、脚なしの円形まな板を使っている人は立って食材を切っている。以上より、敷物やいすの上に座る坐式での生活のときは、包丁人も座って切っていたが、いすに腰掛ける立式での生活になると、包丁人は立って切るようになったのではないだろうか。そして、生活の中での座りかたの変化から起きた労働形式の変化により、まな板の型式が長方形の脚つきのものから、丸い脚なしのものに変わったのではないだろうか。

まとめ

今回調べてみて、日本では奈良時代から多くまな板の例が見られることがわかった。奈良時代の例では四脚式であり、その後、鎌倉時代に両まくら式まな板が出てきた。長い間四脚式、両まくら式両方のまな板が使われてきたが、明治時代になるともっぱら両まくら式まな板が使われるようになり、四脚式は淘汰された。そして、大正から調理台と一緒に脚なしまな板が紹介された。

中国では、礼器である俎が古くから見られるが、この俎がまな板として使われていることもあった。俎がなくなってからも、脚付きのまな板が存在したが、唐代から宋代のころに脚なしのまな板に変わった。

どちらの国においても、もともと脚つきであったことから、まな板は中国から日本に伝わってきたように思われる。しかし、これ以降、まな板に関しては中国の影響がなかった。

なぜなら中国で宋代には脚つきから脚なしに変化しているのに対し、そのころ平安時代であった日本では脚つきのままで、何の変化も見られなかったからである。日本のまな板が脚なしに変化したのは、平安時代からはずっと後の大正になってからであった。中国の脚なしまな板が新しく伝えられることがなかったのか、伝わったとしても生活様式の違いから定着しなかったことがうかがわれる。

中国と日本でまな板が脚つきから脚なしへ変化した時期に大きな開きがあり、日本のまな板が中国のまな板の影響により脚なしに変わったわけではない。相互に影響を与えたわけでもないのに、図らずも日中両国のまな板から脚が無くなったことは、台所仕事が座式から立働式に変わったことに起因していた。労働形態の変化が道具の形を変化させたのである。

注

(1) たとえば英語の chopping board のように、複数の単語を組み合わせて「まな板」を説明するような言語がほとんどである。

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ｘ　古墳時代Ｉ』（奈良国立文化財研究所学報第 39 冊、奈良国立文化財研究所、1981 年）。

(3) 三浦 1993、p.22。

(4) ハードとしての確実な家作り：実践編 12、本工事その５。
(http://www.netpro.ne.jp/~takumi-m/a-jissen-0.htm)。

(5) 小菅 1998 では、図の出典が『主婦之友』となっていたが、『主婦之友』は 1913 年にはまだ出版されていない。ここの文章と照らし合わせてみると、『婦人之友』の挿絵と見ることが妥当なように思われるので、本文では『婦人之友』とさせていただいた。

(6) 小菅 1998。

(7) 高橋 1986。

(8) 住友ベークライト編『住友ベークライト社史』（住友ベークライト株式会社、1986 年）pp.203~204。

(9) 間瀬 2001、p.116。

(10) 『世界大百科事典』（平凡社、1988 年）の「イス【中国】」の項（小泉和子氏執筆）より。

(11) 田中 1985、pp.284～308「二、飲食図」。

〔参考文献〕

小泉 1994＝小泉和子『台所道具いまむかし』平凡社、1994 年

小菅 1998＝小菅桂子『にっぽん台所文化史＜増補＞』雄山閣出版、1998 年

高橋･馬場 1986＝高橋昭子・馬場昌子『台所のはなし』鹿島出版会、昭和 61 年

田中 1985＝田中淡「古代中国画像の割烹と飲食」石毛直道編『論集東アジアの食事文化』平凡社、1985 年

間瀬 2001＝間瀬収芳「俎について」小南一郎編『中国の礼制と礼学』朋友書店、2001 年

三浦 1993＝三浦純夫「まな板と包丁」日本国民学会編『食生活と民具』雄山閣出版、1993 年

山口 1978＝山口昌伴『図説 台所道具の歴史』柴田書店、1978 年

《コメント》

学期期間中になされた口頭発表を聴いた限りでは、ここまで纏まるとは――正直なところ――思っていませんでした。夏休み期間中に、添田さんがそれだけ頑張って調べ上げたということです。まな板という身近な道具を通じて、日本と中国の文化交流史の一側面や、ある必然を伴って道具の形が変化してゆく様子が鮮やかに描かれている点に感心しました。従来の文化史研究の成果を横断して得られた新たな果実だと言えるでしょう。

今回の作業を通じて添田さんは、関心を持った事柄を調べ上げてゆく喜びと、それを文章化する際の苦労とを体感されたのではないかと思います。願わくは、今後ともこのような「研究する」作業を積み重ねてゆかれますように。

（辻　正博）